
言葉と想いの伝え方

スクロール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉と想いの伝え方

【著者名】

ZZマーク

N42810

スクロール

【あらすじ】

部活の先輩がクレープを食べに行くという。

部活の一環として一緒に行くのだけど、俺の予想とは斜め上を行く
展開に……

哲学的な彼女のイベントに投稿する予定の小説です。

みなさまが思っている哲学とは全く違うかもしねいですが、雰囲
気だけでも感じもらえたなら幸いです。

今の時刻は午後3時半、授業から開放されそれぞれ好きなことを始める時間。

部活動に参加せずに友達と遊びに行く者や、部活動に向かう者。まあ、どちらにしろ青春を謳歌してゐるつてところかな。

ちなみに、俺は後者だ。現在部室に向けて移動中。俺の参加しているのは運動部じゃない。運動部に入ろうかどうか悩んだものの、先輩たちの勧誘によつて半ば強引ではあつたけど今部活に参加している。

俺の参加している部活動の名は、『何でも部』だ。

何をする部活動かといつと、『やりたい事をなんでもする』つていうなんとも意味不明な部活だつた。こんな意味不明な部活動が存在しているのも俺が通つている高校が、部活動に関しては寛容だからとしか言い様がない。ほかにも、良くわからない部活が俺が知つてゐる限りでも3つはある。

まあ、この学校の指針は『自主性』『創造性』『自己責任』だからでもあるんだけど、最後の自己責任つて結構高校生に負わせるのは重たい氣がするんだけどな。

ちなみに、俺が勧誘されたのも活動の一環だつたらしい。こんな意味不明な部活だから、自主的に入部してくる生徒が皆無みたいで『後輩が欲しい』という一つ上の先輩の要望に答え俺(後輩)を入部させたみたいだ。

ぶつちやけ、俺が運動部に入りたかったのは充実した高校生活を送りたかったからだ。だから、充実した生活が送れるなら何処でも良かつた。

実際、この部活動に入つて2年、3年の先輩たちと活動した半年はかなり充実した日々であつた。

普通の活動としてはキャンプや海水浴、肝試しなど夏場のイベン

トに関しては走破したようなものだ。

それ以外の活動としては、友人の恋愛事情の詮索や、怪しい先生の尾行、その他諸々。とても他人に言えるようなものではない活動もしていた。だけど、それもとても楽しい部活動の一部として俺にとつてとても充実した日々だった。

夏休みが明けて、3年の先輩たちは遅すぎる受験勉強のため部活を引退して、今は2年の園崎先輩と一人つきりだ。

園崎先輩とは馬が合うみたいで、一人つきりになつたとしても全然苦にならない人だ。多少変な人ではあるんだけど、一緒にいると楽しいし結構な美人さんだ。俺的には最近かけ始めたメガネがグッドな感じ。

部室に着いた俺は、いつもどおり少し古くなつた扉を開けた。

そこには窓際の席にすわり、ライトノベルを読んでいる園崎先輩が居た。

「ちわっす。今日は先輩早いつすね。いつも俺のほうが早く来るのに

この声に反応したのか、読んでいたライトノベルにしおりを挟み、こちらを向いて二コリ。

……先輩、その笑顔破壊力結構高いっす。

「ちーす。今日は、たつくんより早く来ようと結構がんばったんだよ。うちの部活って、一番乗りの人がその日の部活内容決めるでしょ？だから……」

そう言つと、もつていたラノベをカバンに仕舞い、ガサゴソとカバンの中をあさり始めた。

あつあつたと言いながら、俺の田の前に取り出したチラシを突き出した。

「今日の部活は、このクレープを食べに行くこと……もちろん、い

いよね？」

先輩の田には星がいくつも浮かんでいて、キラキラと輝いていた。その眩しい笑顔を前に、俺は拒否という選択肢を無くしてしまった様だ。

「いいっすねえ。クレープとか久しぶりですよ」

「やつたあ！今日の新聞の折り込みチラシで見てからずっと行きたくて仕方なかつたの！うん、今日は良い日になりそうだね！」

「そんなに行きたかつたんすか？まあ、確かに美味しそうですけどね。ていうか、今日はもうすでに半分以上が終了しますが……」

「良いの良いの！そんな細かいことは気にしちゃだめだよ？気にしてたら頭皮にストレスという形でダメージが蓄積して毛根が家出してちゃうよ？」

先輩の言葉に親父の頭皮が頭に浮かんで少しだけ青ざめる。そして自分に言い聞かすかのように『まだ大丈夫だ』と心の中で数回呴いていた。

「どうしたの？なんか少しテンション下がつたみたいだけど……もしかして、最近抜け毛が多いとか？」

先輩は申し訳なさそうに目を伏せた。

「いやいや！そんなことないっすからー全然抜けてないからーほら、全然生え際も後退して無いでしょ？」

そう言って、右手で前髪を搔き揚げて先輩に見せる。先輩はそのままでこのを見て、うんうんと頷いた。

「あ、ほんとだ！まだ生え際は全然後退してない！ふさふさだよ！いやあー、地雷踏んじゃつたかと思ったよ。うん、たつくんがはげて無くて良かつた！」

そう言つとこりと微笑んだ。結構失礼なことを言われているんだけど、その笑顔を見たら文句を言つ言葉が霧散して無くなってしまった。

「じゃあ、まだ剥げてなくて良かつたってことでクレープ食べに行こー！」

「ちょっとまつてください！』まだ』つてつけられたら、俺がこれから剥げるって言つてるみたいで嫌なんですけど……」

「あ、ごめんごめん。日本語つて難しいね。じゃあ、戸締りしてクレープ屋さんにれつづー！」

部室の鍵を俺に押し付けて、先輩はカバンをつかんで颯爽と歩き出していた。

「ちょっと待つてくださいよーせめて鍵を返しに行くまで学校から出ないでくださいね！俺クレープ屋の場所知らないっすから！」

そう叫んでみたものの先輩の姿は俺の視界から既に消えてしまつていた。

「まつたくもつ……」

ため息をつきつつ走つて鍵を職員室に返して先輩を追いかけるのだった。

「ほらみて！あんなに行列が出来てるよ！？大人気だね！きっとおいしいんだよ」

そう言いながら、今にも行列に向かつて走りそうになつてゐる先輩を横目に俺は別の感想を持つていた。

「今日はこの店やめて別の店に行きませんか？」

行列に並ぶ人たちを見て初めに思つたことは、時間を無駄にして何にも思わないのか？という疑問。

そして次に思つたことは、今から自分もその仲間入りをしてしまうのではないかという不安。

「何言つてんのよ？今日は私が活動内容を決める日なんだから、たづくんに何を言われようが今日はあそこのクレープを食べるの…！」

「はあー、やつぱり……」

「みごと不安が的中。」

俺の腕を引っ張りながら行列の最後尾に向かつてずんずんと足を

進める。

「いち、にい、さん、し～……、ざつと10人くらいだね。これら結構早く順番回つてくるかも！」

「はい、そうですねえ～。つていうか、どうしてそんなに笑顔なんですか？順番待つのつてすつげー無駄だと思つんすけど……」

「え？ そんなのクレープが楽しみだから笑顔になるに決まつてるじやん！ つていうか、順番待てる間も楽しいじゃん…どんなものなのかな？ とか、そんな想像膨らまない？」

「俺は全然膨らまないす……先輩だけじゃないっすか？」

「なつ！ 結構失礼なこと言うね、けど、見てみなよ。前に並んでる人たちも結構笑つてるでしょ？」

先輩に言われて前に並んでいる人たちを見てみる。

確かにみんな二コ二コと笑いながら談笑し、自分の順番が来るのを待つてている。

「ほらね。みんなクレープが楽しみなんだよーこんなにみんなが楽しみにしているんだから絶対おいしいに決まつてるじゃん！」

「だけど、この待つ間にほかのいろんなことが出来ると思うんスけど……」

「なに言つてんの？！」この待ち時間も、おいしいものを食べる醍醐味じやん！ おいしいものを食べるには、並ばなくちゃいけないの！ つまり、並べばおいしいものが食べれるつて事だよ！」

「もしもの話ですよ？ 並びました、食べました、糞まずかった。なんてことになつたら、目も当てられないでしょ？だから、空いているお店でそこそこのものを食べましょうよ」

「はあ～、たつくんには何言つても無駄みたいね……、けど、今日はこのクレープを食べます！ なぜなら、私が今日一番に部室に来たから！ 私たちの部活のルールは覚えてるよね？」

「一番に部室に来た人がその日の部活動の内容を決める…… ですね。はあ～、わかりましたよ！ 並べばいいんでしょ？ あ～もう！ 並んでやりますよ！ 並んだら先輩も文句無いんでしょ？ ～そのかわり、

クレープまずかつたら文句言いまくつてやりますからね！」

「はいはい、並べばいいんですよ！絶対まずいなんて事無いから大丈夫ですよ～だ！」

そう言つて笑う先輩の笑顔はとても可愛かった。

我ながら心が狭いことをいつてしまつた氣がするけど、先輩はそんなことまったく気にしてないみたい。

列の進み具合と自分の順番を見て、かかる時間を試算してみる。一人の客につき大体3分くらいで進んでる。んで、俺らの順番が回つてくるのが約10人目。つまり、単純計算30分の待ちぼうけだ。

30分あれば、駅前の本屋によつて新しいマンガやラノベをあさることが出来たかもしれないのに……

のほほんとしてるよう見えて、先輩は意外と頑固だ。だから、今更文句を言つたところで並ぶことに変わりは無い。それなら、先輩の機嫌を損ねないほうが得策だ。

それに、こんなに二口二口して待ち遠しそうにクレープ屋を眺めている先輩にこれ以上の文句を言つつもりもない。

まったく、可愛いというのは意外と武器だつたりするんだなと感心する俺であつた。

あれから30分ちょっと並び、俺たちは今公園のベンチに腰掛けでクレープを食べてた。

「ほら～おいしいでしょ～！このイチゴとってもおいしい！」

そう言いながらクレープを頬張る先輩を見ていると、たまにはこうこう風に順番に並んでみるのも悪くないと思つてしまつ。

「まあ、まずは無いつすね」

「全然素直じゃないね。まあいいけど」

少し不満そうな顔をしているけど、俺が素直じゃないのは今に始

まつたことじやない。それに先輩も不満そうではあるものの、俺の真意はちゃんと伝わっているみたいだ。

「もつと素直になつた方が良いと思うよ？私みたいにきちんとたつくんのこと分かってくれる人ばかりじゃないんだから。もしかしたら、勘違いされてたつくんが嫌われちゃうかもしれないし……」「大丈夫っす。そんときも何とかなりますつて

「あ～もう、先輩の話はちゃんと聞きなよ」

そう言つて先輩は溜息をついた。

「心配してくれるのは嬉しいんですけど、俺もともと友達とか少ないし、少ない友達はみんな俺のこと分かってくれてるみたいだから心配ないっす」

「だから、もつと友達増やしたいって思つたりしないの？」

「あんまり思わないっすね。今でも充分楽しいし」

「だけど、もしかしたら今は友達じゃなくても友達になつたらもつと楽しくなれる人とか居るかもしれないんだよ？」

「そうだけど、今で充分満足してるからあんまりいらないかな？」

いつの間にかクレープを食べきつた先輩が俺のほうをまっすぐに見詰めていた。

まつすぐ俺に伸びている視線に射抜かれて、動けなくなる。

先輩に言つたことに嘘偽りは無い。だけど、先輩の言つていることもわかる気がする。

確かに、友達は多いほうが良いだろ？。だけど、ただ多いだけの友達に意味があるのかと聞かれたら、俺は少なくとも本当に仲のいい友達だけで良い友達だけでいいと思う。

だけど、先輩は挨拶を交わすだけの友達でも良いから多いほうが良いと言つて来る。

実際、先輩は深い付き合いをしている友達は少ないが挨拶を交わす程度の友達は数え切れないくらい居る。

何処に行つても、そういう友達がいるから寂しくないのだそうだ。「あのね。たつくんにはたつくんの考え方があるから私の考え方を

押し付けるつもりも無いんだけど……」

先輩はそう言つと少し俯く。何かを言いたい様に見えるんだけど、言おうか言わないか迷つてるみたいだ。

「別に先輩にどうこう言われたって、俺は俺の考え方を変えるつもりなんてないっスから、先輩の考え方とか言つて貰つても大丈夫ですよ？」

「考え方とかそんな難しいことを言つつもりなんてないの。だけど、『クレープを買う』とか『友達を作る』って言つ行為一つをとっても、人にとってこんなにも感じ方が違うんだなって思つてね」

「はあ……」

先輩の意図していることが掴めず、曖昧な返事しか返せない。困惑する俺を置き去りにして、先輩は話を続けた。

「私はこのクレープを買うのがとっても楽しみだった。だけど、たっくんは並んでも買おうと思わなかつたでしょ？」

「そりやあね。並んでも買うほどの価値があるかなんてあの時は思わなかつたから。まあ、実際買つて食べてみて、並んでもしまう人の気持ちも少しだけだけど判つた気がしますけどね」

俺の言葉を聞くと先輩はニコッと笑つた。

「うん、そういう風に言つてもらえたらこっちとしても嬉しい限りだよ。でもね、人にはそれぞれの感覚つていうものがあつて、私が感じたクレープの味とたっくんが食べたときに感じたクレープの味は違うかもしれない。私がおいしいと思つても、たっくんはおいしくないって思うかもしれない」

「まあ、人には好き嫌いって言つもんがありますから、それは当然のことだと思ひますけど？」

「好き嫌いって言うものは、その人だけのもの。つまり、他人にはわからない。教えてもらえるかもしれないけど、教えてもらつたつてその人の感じてること全てがわかるわけじゃないじゃん。つていふことはさ、例えばだよ？たっくんの感じていい好き嫌いは教えてもらつたとしても私には一生わからないものになるじゃん」

そこで先輩は話を一度区切つた。

そりゃあ、こんなに長く話したんだから一息つきたくもなるだろう。それに、俺も先輩の話をまとめる時間が欲しい。

先輩が何を言いたいのかが全く分からない。俺に何を求めてるんだろう？

「えっとね、つまり、人は自分以外の人のことなんて分かる分けないの。もしかしたら、自分以外の人は感情なんて持つてないかもしない。プログラムされた行動をし続けるゲームのNPCの様な物なのかも知れない。だつて、その人が思つてること、感じてることがこちらには伝わらないから」

「ちょっと、先輩のお話は強引ですね。先輩は、自分以外の人の感情や心が分からぬって言つてますけど、現に俺は先輩のことを考えてますよ？一緒に食べたクレープだつておいしそうを感じましたし」

「もう！途中で口を挟まないで！今がいいところなの！もつちよいとこで終わるから、感想はその後で言つてくれる？」

なんか怒られた。

たまに意味不明なことをする先輩だけど、今日の先輩は輪をかけて変だ。

「何処まで話したっけ？」

「考へてること、感じてることが分からぬってところですか？」

「そうそう！感じたこと、考へてることなんてさ、感じた人考へてる人以外分かるわけ無いじゃん。けど、私はどうしても私が考へて感じたことを伝えたいの」

「そうなんすか？」

「そうなの！茶々を入れない！それでね。一生懸命考へたの、ここ一週間くらいはそのことばかり考へてた。で、昨日結論が出たの。そういう先輩はすこし顔が赤かつた。

先輩の話は要領を得ないが、なんかおもしろいからすっかり聞き入つてしまつてる。

「」
じがこれだけ、一生懸命聞くような話なんだから、一生懸命話して先輩が興奮気味なのは仕方の無い話だ。

多分、昨日出た結論というのがこの話の終着駅なんだろう。早く聞きたい。先輩の考えが知りたい。そういう気持ちがあふれてくる。まあ、部室で二人きりという状況、美人の先輩、馬が合つて一緒に楽しい、メガネ効果で好感度アップetc……

ぶっちゃけてしまえば、俺はこの先輩が好きなんだ。だけど、先輩が俺のことをどう思つてるかなんて分からない。

普段の行動から考えれば、嫌われて居ないのは確かなんだけど告白するような状況でもない。

俺としては先輩が卒業するまでの間に告白できれば良いなんてのんびり構えてる。

だけど、先輩のことをもつと知りたいと思う気持ちがある。どんな風に考えているのかとか、どんなことを感じているのかとか。好きな人のことがもつと知りたいのだ。

「で、出た結論というのは？」

努めて冷静に、いつもどおりを振舞う。心中は好奇心や色々なものであふれかえっているものの、そういう動搖は見せたくない。「人が自分の思いを相手に伝えるには、言葉だけじゃ足りないってことが分かったの。言葉って言つものは色々な捉え方が出来るでしょう？発音や状況でその言葉がもつ意味は大きく変わつてくる。つまり、今ここで私がたっくんに好きだと言うとしても、たっくんが私が思つている意味でその言葉を受け止めてくれる保障なんて何処にも無いの。だから」

そういうと、先輩は俺のほうに体を寄せて来た。俺は、先輩の『好き』という言葉に胸を打ちぬかれ身動きが取れなくなつていた。例え話だつたとしても、先輩から『好き』という単語が聞けたことが自分で思つてている以上に嬉しい。

先輩は体と体が触れ合うのではないか？というくらい体を俺に寄せていた。金縛りに合つたかのように動かない体。そして、俺の視

界は徐々に先輩の顔だけで埋め尽くされて行き、そして……

唇にやわらかいものが触れた。

触れたのは一瞬だけだった。もしかしたら、これは俺の夢の中の出来事で、自分の理想を夢として見ているのかもしれないと言え思つた。

だけど、もとの位置に戻つた先輩の真つ赤な顔をしていたし、思いつきりつねつたふくらはぎは物凄く痛かつた。

何が言いたいのかというと、これは現実だつて事。

真つ赤な先輩はさりに話を続けた。

「これなら、私が思つているとおりの意味でたっくんに伝えられるでしょ？」

照れたように笑つ先輩は卑怯なまでに可愛かつた。

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。
もし、感想や評価をいただけたらものすりへうれしいですーーー！
よろしくおねがいします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4281o/>

言葉と思いの伝え方

2010年10月21日08時25分発行